

ウシの背に乗って往診した 仙人のような医者永田徳本

わが国はいままで世界一の長寿国となり、百歳を超える高齢者も数多い。

しかし、昔だつて百歳を超える人がいなかったわけではない。

武内宿禰たけのうちのすくねや記紀ききの天皇はさておき、近代の比較的信頼のおける人物じんぶつに天海僧正てんかいそうじょう（一五三六～一六三四）や永田徳本（一五一三～一六三六）がいる。

天海僧正は徳川家康のブレインの一人として割合知られているので、永田徳本について解説してみよう。

徳本は日本の扁鵲へんじやく（中国戦国時代の伝統的名医）と呼ばれた医者で、もと三河の国の人といわれる。

武田信玄に仕え長く甲州に住んだので、永田というより「甲斐の徳本」として知られている。武田氏が滅んだ後は諸国を巡り、のちに信州の諏訪に落ち着いた。

徳本は山に入つて薬草を採つてきて、独自の処方くわで薬を作つたが、それがよく効くので、人々は彼を神様のようにあがめたという。

徳本は名利に淡泊で、外出するときは薬を入れた頭陀袋ずたごくらを首にかけ、牛の背にゆつたりとまたがって、「甲斐の徳本、一服十八文」と叫んで売り歩いた。

どんな病人でも快く診察し、薬代として十八文だけもらい、どんな難病を治しても十八文、どんな金持ちからでも十八文と決めてそれ以上は決してとらなかつたという。

寛永の初め、徳川秀忠（二代將軍）が病気になる、御典医たちが手を尽くしても効果がないので、たまたま江戸にいた徳本が呼ばれることになった。

例によつて牛の背に乗つて城中入り、診察をして頭陀袋の中の薬を調合してすすめたところ、数日にして回復したので秀忠も大喜び。

望みのほうびをとらせようとしたが、徳本は固辞し十八文の薬代だけ受け取つて城を出た。

徳本の無欲さに皆感じ入つたと伝えられている。ちなみに張り葉のトクホンは彼の名声あやかに肖つたもの。

